まえがき

「自由進度学習」が、近年改めて教育の場で注目されています。もともと個に応じた学びを大切にする実践として知られていたものですが、２０２１年の中央教育審議会答申で「個別最適な学びと協働的な学びの実現」が明確に打ち出されて以降、その意義が今の教育の方向性と重なり合うかたちで見直されつつあります。

実際、子どもたち一人ひとりの学びに丁寧に向き合おうとする先生方が、こうした考え方に可能性を感じ、「やってみたい」と試行錯誤を重ねる姿が、各地で少しずつ増えてきているように思います。

「自由進度学習を始めてみよう」
「自由進度学習に取り組んでみたい」

そうした先生方の姿を見るたびに、「ああ、子どもたちの学びに目を向けているんだな」「今の授業を変えなければという思いがあるんだな」と私は受けとめています。子どもたちの姿に揺さぶられ、立ち止まりながらも前に進もうとしている姿に、私自身、たくさんのことを学ばせてもらっています。

しかし、自由進度学習に対する印象や実感はさまざまです。「やってみたけれどうまくいかなかった」「自由にさせるのは難しい」「放任になってしまうのではないか」…そんな戸惑いや不安の声も少なくありません。その結果、「一斉授業か自由進度か」という、どこか二項対立的な捉え方になってしまうこともあります。

本当に大切なのは、方法を選ぶことではなく、子どもたちの学びをどう見るか、何に気づき、どう関わっていこうとするかではないでしょうか。実際、自由進度学習を取り入れようとする先生方の多くは、方法に頼りきるのではなく、子どもたち一人ひとりの姿を見ながら調整し、関わりを模索しています。だからこそ、その途中で出会ううまくいかなさや迷いにも、大きな意味があるのだと思います。

本書は、「自由進度学習をやってみよう」と思い始めた先生だけでなく、すでに現場で実践しながら迷いや揺らぎを抱えている先生と一緒に考えていくための本です。

「どうやるか」ではなく、「子どもたちとどんな日々を過ごすか」「どんな関係を育てていくか」といったところに視点を置いています。自由進度学習を支えるのは、やはり学級づくりです。子どもたちをどう見るか、どんな関係を築くか、どんな空気の中で共に学ぶのか。それがすべての土台になると私は思っています。

だからこそ、「学級づくりからはじめる」と名づけました。順序を示すというより、「自由進度学習をやってみよう」と思ったときに、「学級づくりから」という視点があることで、両方を行き来しながら進めていけると思っています。

本書が、子どもたち一人ひとりがその子らしく学び、生きていくことを支えていくための、小さな問いと対話のきっかけになればうれしいです。どうぞよろしくお願いいたします。

２０２５年６月吉日

若松　俊介

CONTENTS

まえがき …… 003

第1章 私の考える自由進度学習

問いと共に育つ、子どもたちの学び …… 012

- 「自由進度学習」という言葉と出会い直す …… 012
- 自由進度学習の原点とは？ …… 014
- 自由進度学習は特定の方法ではない学びの文化 …… 015
- 4月〜7月：問いの土壌を耕す …… 017
- 9月〜10月：問いとふり返りが交差する …… 018
- 11月〜2月：問いに導かれた探究へ …… 020
- 3月：自分の学びに出会い直す …… 021
- 「自由進度学習」は関係の中に育つ文化である …… 023

第2章 今、なぜ「学級づくり」なのか

学ぶ場の土台としての学級 …… 026

学級を子どもたちと話し合いながらつくる …… 030

多様性を尊重する学級づくり 〜個別化と孤立の防止〜 …… 034

第3章 子どもたちにとって「自分ごと」になる学級へ

自由進度学習を支える学級づくりステージ❶

ステップ1 「やらされ感」をなくす仕掛けをする …… 042

ステップ2 「見える化」で学級に流れをつくる …… 048

ステップ3 学級会・話し合いで子どもたちの声が響き合う場をつくる …… 054

ステップ4　子どもたちの小さな問いを取り上げる……060
ステップ5　プロジェクト&係活動で主体性を育む……066
ステップ6　「ふり返り」が学びを動かすとき……072

第4章　自由進度学習を支える学級づくりステージ❷
「うまくいかない」を乗り越える学級に

ステップ1　行き詰まりを成長のチャンスに変える……080
ステップ2　話し合いとふり返りの文化で課題を乗り越える……086
ステップ3　教師の関わり方で自己調整力を育む……092
ステップ4　挑戦に寄り添い、共に考える応援の文化を育む……098
ステップ5　ICT活用で孤立を防ぎ、達成感を共有する……104

第5章　自由進度学習を支える学級づくりステージ❸
子どもたちが自ら成長する学級に！

ステップ1　教師の関わりが「最小限」でも子どもたちが動く学級へ……112
ステップ2　目標を「自分でデザイン」する学級……118
ステップ3　リーダーシップ・フォロワーシップを育む……124
ステップ4　子どもたち主導のイベントや探究活動で「問い」を深める……130
ステップ5　自分のペースで活動する「真の自由進度」……136
ステップ6　「まなざし」が育ち合う教室へ……142

第6章　自由進度学習の実践事例！

自由進度学習を進められるようにする……150

- 「物語文って、どんな学びだろう？」から始まる国語の授業……150
- 子どもたちが自分の読みをつくる自由進度学習の時間……152
- 1時間目　初発の感想を書く……152
- 2時間目　感想を聴き合い、読み深めたいテーマを見つける……153
- 3～7時間目　一人で読み進め、自然に協働的に学び合う……154
- 8時間目　ふり返り、自分の読みを再構成する……157
- 個の探究と協働が響き合う学びへ……158

蓑手章吾 × 若松俊介 対談！

試行錯誤からの自由進度学習のはじめかた……160

あとがき……172

問いと共に育つ、子どもたちの学び

「自由進度学習」という言葉と出会い直す

「先生、○○はやらなくてもいいですよね？」

そんな子どもたちからの問いかけに、私はこれまで何度も立ち止まってきました。子どもたちが、先生の示す「やらなければならないこと」に縛られているからこその言葉だからです。それは、「やらせる」「終わらせる」といった発想による指導や支援が、ずっと行われてきたことにより生み出された姿に他なりません。そこに「その子らしさ」や「自由」はありません。そうした姿が子どもたちとの関わりについて見つめ直すきっかけになりました。

私が「自由進度学習」という言葉に初めて出会ったとき、「これは、ただの『自習』とは違っておもしろいな」と感じました。そして、「ただの『自習』に終わらせてはいけない」とも思いました。子どもたち一人ひとりが自分のペースで進めるということ以上に、**自分の問いと共に、自分の学び方を編み直していく過程そのものに、この学び方の本質がある**と思ったのです。

私はこれまで、自分が子どもたちと過ごしてきた時間や、その中で培ってきた学びのかたちを、「自由進度学習」と呼んできたわけではありません。でも、子どもたちが自分のやり方で、自分なりの問いを大切にしながら、丁寧に学びを進めていく姿には、「自由進度学習」という言葉とどこか深い通じ合いを感じてきました。そして、そうした子どもたちとの日々のやりとりを振り返るうちに、「自由進度学習」という言葉が、自分の実感と少しずつ重なって見えてくるようになりました。

自由進度学習の原点とは？

自由進度学習とは、教師が用意した学習内容の枠組みの中で、子どもたちが自ら課題を選び、順序を決め、進度を調整しながら学びを深めていくスタイルです。そこには「指導の個別化」と「学習の個性化」を同時に実現しようとする意図が込められています。

つまり、**子どもたち一人ひとりの興味・関心、学習スタイル、習熟の度合いに合わせてその子にふさわしい学びの在り方を一緒に見つけていき、そして、その子が自らの学び方をつくっていく**という考え方です。

この「指導の個別化」と「学習の個性化」は、中央教育審議会の答申や文部科学省の方針の中でも繰り返し言及されてきました。その背景には、教師が一方的に教えるのではなく、子どもたち一人ひとりの歩みや声に寄り添いながら、学びのかたちそのものを共につくっていこうとする、長い時間をかけた模索と実践の積み重ねがあります。

この理念自体も、決して新しいものではありません。戦後の日本の学校教育において、子ども中心の学びや個別の学習スタイルを探る営みは、脈々と受け継がれてきました。**特に１９７８年、愛知県東浦町立緒川小学校がオープン構造の校舎改装を契機に始めた自由進度学習など「個別化・個性化教育」の取り組み**は、今も全国の学校に大きな示唆を与えています。

同校では「単元内自由進度学習」「週プロ」（週間プログラムによる学習）「オープン・タイム」など複数の学びの場面を通して、子どもたちが「自分で考え、自分で決め、自分で進める」ことを大切にした教育が行われてきました。子どもたちが学びの主体として育っていくプロセスが、学校全体で支えられています。その姿に、私も深く共鳴しています。

自由進度学習は特定の方法ではない学びの文化

ただ私は、そうした歴史や実例に敬意をもって学びながらも、そのまま再現しようとすることには慎重でありたいと思っています。というのも「自由進度学習」を、あらかじめ決められた仕組みや方法として導入するのではなく、**「今、目の前の子ども**

たちと、どんな学びをつくりたいか」という問いから、毎日を歩んでいくことこそが、最も大切だと感じているからです。

実際、同じように課題を選べる場面があっても、子どもたちの問いがその場に存在しているかどうかで、学びの意味はまったく違ってきます。問いが育つ土壌がなければ、自由進度は単なる放任に見えてしまうかもしれません。問いが交わされ、ふり返られないなら、それはたとえ個別ではあっても、深い学びとは言えないでしょう。

だから私は、**「自由進度学習」という言葉を、ある特定の方法ではなく、教室に生まれてくる学びの文化として捉えたい**と思っています。そしてその文化は、決してあらかじめ用意されたものではなく、子どもたちとの日々のやりとりや揺らぎの中から、少しずつかたちになっていくものだと感じています。

私は、「自由進度学習をしていた」のではなく、子どもたちと共に過ごす時間の中で、問いを手がかりに学びを耕していく先に、気づけば自由進度的な風景が立ち上がっていたのです。そういう在り方で、この言葉と関わっていたいのです。

今回、自由進度学習という視点から、子どもたちと過ごす一年間の学びと、学級づ

くりのイメージを年間スケジュールとして整理してみました。そのイメージをもとに、私なりの考えを紹介したいと思います。

4月〜7月：問いの土壌を耕す

年度の初めに私が大切にしているのは、「問いが芽生える土壌」をじっくり耕すことです。子どもたちは最初から「自分の問い」や「自分の学び方」を明確にもっているわけではありません。それらは、日々の暮らしや学びの積み重ねの中で、揺れながら育っていくものだと思っています。だからこそ、**まずは安心して自分を出せる関係性と空気を、教室全体で育てていきます。**

掃除や係活動、朝のちょっとした話し合いの中に、問いの種はひそんでいます。「このやり方ってほんとにいいのかな」「もっとこうしたら気持ちよく取り組めるかも」といったひっかかりをそのまま言葉にして、一緒に考えていけるようにすると、問いを感じていい、語っていい、という文化が少しずつ育っていきます。

授業でも、**「どれが正しいか」**よりも**「なぜそう思ったのか」「どう考えたのか」**に注目

していきます。たとえば、算数では考え方の違いを比べ、国語では言葉に対する感じ方を出し合いながら学びを深めていきます。そうした時間の中で、自分の思考や感覚に気づくことが、問いの芽となって表れてきます。

一学期の中頃から後半にかけて、子どもたちは少しずつ「自分らしさ」を出し始めます。「ここからやってみたい」「こういう方法が合っている気がする」といった声が出てきたとき、私は**「自分の問いをもとに、自分なりに学びを進めてみる」時間を少しずつ取り入れていきます。**

この段階でうまくいかなくても、それを一緒にふり返ることを大切にします。「なんか思っていたのと違った」「途中でわからなくなった」といった経験も、次の学びを考える材料になります。「どこでつまずいた?」「何が引っかかっていた?」という対話の中から、子どもたちは自分の学び方を少しずつ見つけていきます。

9月~10月：問いとふり返りが交差する

二学期に入ると、一学期の積み重ねが土台となって、問いとふり返りのサイクルが

子どもたちの中に根づき始めます。子どもたちは自分なりの進め方や考え方に自覚的になり、「自分で学ぶこと」への感度が高まっていきます。私はこの時期、単元の構成そのものを、問いとふり返りを軸に据えて設計していきます。たとえば**理科や社会では、子どもたちが自分の気づきや疑問を起点に調べたり比べたりする活動を中心に置き、国語や算数では学び方の選択や順序を少しずつ手渡していきます。**

この頃には、ふり返りがただの感想ではなく、次の問いを生むものに変わっていきます。「今度はこういうふうに進めてみたい」「これって、別のこととも関係してそうだね」といった声が、教室のあちこちから聞こえてきます。

この時期には、**ICTを使って自分の学びを記録し、ふり返ること**も自然になってきます。記録された自分の言葉を読み直したり、他者と画面を見ながら話したりすることで、学びの見通しや問いがさらに立ち上がっていきます。その中で、問いを共有し合う文化も育ってきます。ある子の問いが、別の子の視点によって深まったり、問い返されたりしながら、学びが多角的に広がっていきます。

この広がりの中に、私は「自由進度学習」の核心があると感じています。単に「自由